◆全体の植栽計画・管理について

大きな植栽計画としては、低いエリアでは潜在自然植生であるエノキームクノキ群集の構成種をメインとしています。しかし、それだけだと四季の彩りが感じられないので、丘の上はマツやサクラ、里山系樹木などを配植しています。特に南公園ではどんぐりのなるクヌギやコナラ、カシ類を配植しています。

マツは関西の里山の尾根筋の植生ということで、丘の上に植栽しています。中津にある神社には松林の鎮守の森があったという話もあります。松枯れの心配もありますが、ここは都市部であり、松枯れ被害地から隔離されているので大丈夫だろうと思っています。

北公園のエントランスもマツを植栽しています。松林を登って行くと、奥にサクラがあります。マツ越しに桜が見えるような日本らしいランドスケープとして計画しています。苦労したのは真っすぐな幹のマツがなかなか見当たらなかったことです。それを探すために、大分から福島まで日本全国の圃場を探し回りました。

地表面には、黒石の火山砂利のマルチングを施しています。南北とも統一しています。

▲ゲートランタン横のガーデン

▲色彩ガーデン

◆色彩ガーデンについて

色彩ガーデンは、80種類以上の在来種を中心にしたガーデンとなっています。彫刻家の金子潤さんのアートがありますが、春夏秋冬の彩りがある色彩ガーデンと呼応するように、色彩感あふれるアートになっています。

既にたくさんの蝶が飛来しています。おそらく梅田スカイビルの「新・里山」にたくさん生息しており、あそこからトンボだけでもかなりの種類が飛来していると思います。

現在はスズメが一番多いですが、シジュウカラも飛来しています。今後かなりの種類の鳥が飛来してくると思います。

植栽管理は、常駐で4、5人程度で対応されています。

▲色彩ガーデンのアート

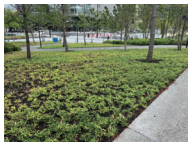
◆広域避難場所について

ここは広域避難場所に指定されており、大規模都市火災が起こった時に避難する防災公園となっています。

防災施設としてマンホールトイレや防災スピーカー、備蓄倉庫などが設置されています。水盤の面積は避難面積になるので、30分以内に水が抜けるようになっているなど、細かい条件をクリアして設計しています。

通路の幅は、敷地外からも逃げ込んでこれる幅を確保しています。北公園エントランス部は、防災公園の避難通路として5%で踏み倒せる植物（ササ）にしています。有事の時に、人が登っていけるようにわざと低い植栽にしています。

▲避難場所となる芝生広場


▲北公園エントランスのササ植栽

◆雨水対策について

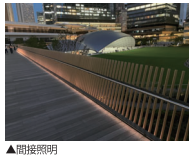
梅田では2013年のゲリラ豪雨で、一部で冠水被害を受けているので、雨水貯留流出抑制施設対策がとられています。大地に根差しているため、地下浸透をするというのが大きく、表面排水分は雨水貯留槽に入り、オリフィス桝でゆっくり放流しながら敷地外に出しています。直接放流はほぼ1割ぐらいで抑えており、南公園に降った雨水は地下の貯留槽に流れ、その一部は、植栽灌水に利用しています。約10年前に起こった規模の豪雨がきても冠水しないような機能を有しています。

▲サイン

◆サイン・照明について

サインは井原理安デザイン事務所がデザインしており、できるだけ緑に溶け込ませるというコンセプトで、ガラスのサインとなっています。

照明は内原智史デザイン事務所がデザインしており、グレアが見えないような照明で計画しています。平均3.0ルクス以上の照度を確保しつつ、生物多様性にも配慮し、明るすぎないように配慮した照明計画になっています。


▲間接照明

◆ひらめきの道について

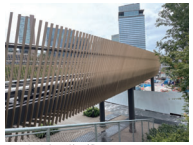
ひらめきの道の床デッキは木材を使用しています。あえて、人工木材は使用せず、マサランデューパというブラジル産の木材を使っています。設計当時の５年程前から現在にかけて、より一層の木材活用が推進されてきていることから、先駆けているかなと思っています。

東西道路を横切る橋は道路をまたいでいるので、占用面積を最小限とするために道路に垂直横断が通例ですが、行政協議を重ね、公園施設の上空通路として斜めに架けることができました。

桟の角度は15度に設定して、外側に広げています。幅員は4.0mですが、桟を外側に傾けていることで、視覚的に広く感じられます。東西道路に向かって桟の角度が徐々に立つようにして、道路の上空部の桟についてはほぼ垂直に立っているデザインになっています。徐々に桟の角度を変化させるような工夫は行政協議を行いながら決定していきました。

歩行部分は、縦断勾配5.0%程度ついています。これは、日本の太鼓橋をイメージしていて、視線の先に何かあるな?という期待感みたいなものを考えたうえでデザインされています。また、下が建築限界5.5mを確保するということも取り入れています。

デザインは日建設計の建築設計でしています。土木流の計算で設計すると、ここまで軽やかにならていなかったかもしれません。公園の風景を上空から眺めるといった異なった体験をすることができます。


▲ひらめきの道の桟

▲東西道路を越える橋

▲東西道路

◆東西道路について

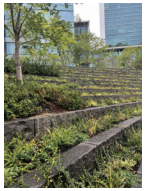
公園の真ん中に道路があるのが大きな課題のひとつだったのですが、それを３つ目の広場としてデザインするというのがコンペ時にGGNから出ていた思想です。

中央分離帯の横断防止柵は可動式になっています。イベント時などはすべて取り外して、南北公園が一体利用できるように備えています。その時は道路を通って南北公園を互いにアクセスできるようになります。歩道はキッチンカーが上がってこれるような舗装設計となっています。

腰掛けられるところは、模様が特徴的なニューグリスファンタジーという中国の石材を使っています。少し弓なっている形状になっていますが、細部に渡る部分まで3Dモデルで検討を行い、現地で実寸モックアップ確認もして実現しました。

東西道路沿いの高木は、ケヤキと真ん中あたりはエノキやムクノキなど公園内の樹種をランダムに配植しています。ケヤキは、グランフロント大阪のケヤキ並木を踏襲しています。

▲石材を用いたベンチ


▲両翼に広がる石垣

◆うめきたの森の石垣の魅力について

北公園は、2027年に完成する高さ４mの滝の両翼に広がる石垣の部分が、ランドスケープ的には一番魅力があると思っています。

石垣は、無垢の石をそのまま石積みに使用し、天端と側面の間に植栽が入り込みながら、徐々に勾配１：３の緑の斜面に溶け込んでいく美しいデザインになっています。

全体的に植栽がすごく元気に生育していますが、特にテイカカズラやオオイタビが繁茂している状況です。また、グラス類も交じりながら、とても良い景観が展開されており、すでに鈴虫も生息しています。石垣下の植栽帯にはグラス類があることで、石垣への進入抑止感が生まれています。

石垣の詳細として、石と石の目地は２cm取り、ダイナミックさを感じられるよう表面を割り肌仕上げにし、一部には矢跡石も活用しています。

石と石の目地部が５cmのところを境界として、左は補強土壁に石を固定し、右は建築躯体に乾式で石を張り、左右で躯体構造が変わっています。しかし、パッと見ても躯体が分かれていることがわからないような石積みの仕がりとなっています。

植栽がそのままだと石の間に入り込んできているデザインは、上のホテル客室から見下ろしてもすごく美しいランドスケープデザインになっています。

丘上部の石垣も、うまくデザインできたと思っています。この石は、同じ厚みの石を斜めにしていますが、上に登りにくいように武者返しのように工夫しています。一番上の石は無垢石で施工しています。設計時は中央の水盤部分と同じ張り石でしたが、現場で無垢石に変更したことで、全体的に石垣の迫力が出たと思います。

ランドスケープ的には一番設計が難しかったです。また、施工も非常に手間が掛かり、難しかったと思います。今までに見たことのないデザインになっていると思います。

▲石垣と前面の植栽

▲躯体構造が異なる境界部

▲丘上部の石垣ディテール

◆建築とランドスケープについて

建築とランドスケープの協働について、まず敷地全体が「緑の潤った大地」であるというランドスケープのコンセプトの提案がGGNよりありました。

建築のデザインは、キューブが角度を変えながら、民地から公園にかけて徐々に小さくなるような群造形としてデザインされています。その配置は、ワークショップで模型を作って、それを外したりくっつけたりと試行錯誤しながら検討されていきました。

GGNと一緒に仕事をし、ランドスケープがプロジェクトをリードしていったことが非常によかったと思っています。日本のランドスケープ業界もこれからどんどん変化していくべきところかと思います。

公園部分は4.5haありますが、決して広くありません。ランドスケープデザイナーが主体となり、ランドスケープの重要性を事業者・設計者チーム内で共有することができたため、建築面積を当初計画よりも小さくするなど、限られた公園面積のなかでも豊かな緑を実現することができました。

ランドフォームに対してどう建物を配置するか。基本的に丘に建築が埋め込まれている状態で、北公園にある安藤忠雄氏設計監修で日建設計が設計したミュージアムはほぼ地中に埋まっている状態です。

Park-PFIなどで公園にカフェなどの民間施設が入ってきたりする事例もありますが、室外機が丸見えで設置されているなどの裏がある時が結構あると思います。ここでは、建物の裏側を作らないように建築が徹底的にデザインされていることも重要なところと思います。

▲植栽の背後にあるキューブ状の建築

▲キューブ状の建築（VS.）

▲ひらめきの道から見た梅田スカイビル（左）とグランフロント大阪（右）

全体としてランドスケープアーキテクトがリードし、プランナー、建築家、エンジニア等が密に協働していることが特徴です。コンペの時点で、中央部に都市公園をつくる与件は当初からありました。

街区全体が「大阪本来の潤った大地」であるというコンセプトを共有し、ランドフォームで南北を繋ぐというようなことは、ランドスケープリードでGGNが提案し、それに応じて建築との協働により、公園内のキューブ形状の建築ボリュームが配置されていきました。北館の高層建築低層部も、同じように角度を振って配置されたキューブがスパイラル状に配置され、公園部分と一体的なデザインとなっています。

公園ができたことで、グランフロント大阪や梅田スカイビルも含めて、真ん中に余白のあるコアとなる空間があり、それを囲んでいるようなまちになりました。梅田スカイビルの見え方の角度は公園や民地の屋上庭園部分においてもすごく意識しています。水盤には、周辺の街や緑とともに映り込むようにデザインされています。

◆この公園が出来たことで梅田は変わるでしょうか。

確実に変わっていくと思います。大阪梅田駅は、約240万人の交通人流があり、多くの人たちが公園を利用するでしょう。また、都市の中で自然を感じ、豊かな時間を楽しんでくれると期待しています。

都市の中でまず自然を眺め感じるという楽しみ。それがwell-being的には非常に良いことだと思っています。この大阪駅前に生まれた質の高いパブリックスペースが、都市のにぎわいと共に豊かな時間を過ごせる次代の都市開発のモデルとして発展していくことを期待しています。

◆インタビューを終えての編集長の感想

（株）日建設計の小松さんには、お忙しい中、また、天気が悪い中で、現地説明をして頂き、本当にありがとうございました。大阪の一等地に自然豊かでゆったりとした居心地の良い公園が出来たことも踏まえて、これからの梅田の街がどのように生まれ変わっていくか、とてもワクワクしています。また、梅田界隈だけでなく、大阪全体に人の賑わいや豊かな緑が派生していくことを期待します。

取材・編集・構成　荘田隆久、増田将典、小野 隆、多田祥子、友国 慎也